

はじめに

日本農業工学会会長 橋本 康

田淵俊雄前会長からのご指名で、現在第 VII 期の会長を仰せつかっている橋本です。今年秋に CIGR2000 年記念世界大会が我が国（筑波）で開催されるため、国際的な学会の経験と健康から選ばれたものと心得て居ります。いずれにせよ恐れ多いことで、3年の任期が切れようとしている現在も身に余る使命感に緊張しております。

しかし CIGR2000 年記念世界大会は一過性のお祭りに過ぎません。これをトリガーとし国際的な観点から 21 世紀の農業工学の使命を考え直し、明確な展望をもつことが重要ではないでしょうか。CIGR の受け皿が主要な目的で創設された本会にとって、国際化は無論重要であります。世界大会の準備にあたっては、役員は無論、先輩各位、同僚各位の献身的な努力により少しづつ先が見えておりますが、国内的にも農業工学の置かれた現状、細分化された多くの傘下学会の協力体制、農業工学者として社会に出ている我が同輩への支援体制等々、かつては同窓会的な仲良しクラブ程度の意味しか持たなかった我が日本農業工学会も、激動のこの時代を迎え想像を絶する多くの難問に直面しております。

その一つ、JABEE（日本技術者教育認定機構）の問題は、細分化で進歩した学術の最先端と技術者の個人資格とを如何に調和させていくか、しかも資格のグローバル化を如何に達成していくか等、専門領域をやや広くとらえ、国際化と整合させる必要があります。4-II で現在までの経緯をご説明いたしますが、この問題は、技術者が社会の変化に対応できるよう継続的に最新技術の研修等、生涯学習を学会レベルでサービスして行くという難しい問題を含んでおります。また、独立行政法人化を控えた大学のカリキュラムを左右し、専門分野の興亡に繋がる程重要な問題であります。

認定に関わる専門の基礎や専門の問題作成の基準に関しても、日本農業工学会に加盟している 11 学会に細分化することは到底無理であります。そこで、農業土木系に 2 学会、農業機械系に 2 学会、農業環境工学系に 7 学会と 3 分割して協力体制を推進していくことを鋭意検討しているところであります。ある意味では、日本学術会議の農業土木学研究連絡委員会（以後研連と省略）、農業機械学研連、農業環境工学研連等と日本農業工学会とが車の両輪として、農業工学に関する諸学会の協力体制を構築し、農業工学の今後の展望を探索していくことが重要であります。もはや仲良しクラブからの変身が必須であります。

さらに農業工学は「工学」の先端技術を「生物」と言う総合的な対象で生産の効率化を推進する使命を持っており、工業社会が抱える「統合化」への課題を一步先んじて実践していると云っても過言ではありません。最近の本会のシンポジウムがまさに多面的な角度から「統合化」を論じていることが、その証左と云えるのではないのでしょうか。ここ 2 年程の「日本農業工学会シンポジウム」は、「大型農業と農業工学」（平成 10 年 5 月 20 日）及び「環境調和と農業工学」（平成 11 年 5 月 21 日）に関するものでした。

最後に、この程新たに創設されたフェローについて触れたいと思います。欧米のフェロー制度は、終身的にそのソサイエティーにコミットし、それを誇り、組織を防衛し、高揚させると云われ、世界的な大学では幾多の優れたメンバーをフェローとして顕彰し、その組織の支えとしています。日本農業工学会は、細分化された農業工学の統合的な協力を推進するサロンのなとほころに大きな価値があります。フェローの存在と活躍が重要になります。今後傘下学会のメンバーにフェローの輪を広げて行ければ、農業工学の将来への多くの不安を解消することになるかとささやかな希望を持っております。2004 年の創立 20 年の頃には、本会が約 100 名のフェローに支えられ、農業工学の展望をさらに明確にし、本会のステータスを確立し、輝かしい未来へと邁進出来ることを、切に願うものであります。最後にこの小冊子がそのような農業工学会へ連なる一里塚の道標の役割りの一端を担えることが出来れば、役員・関係者一同にとって望外の喜びであります。